

## 2. 子どもの教育について II

### 目 次

1	はじめに……………	120
2	子どもに期待する学歴……………	120
3	子どもの配遇者に期待する学歴……………	122
4	子どもに期待する人生目標・職業……………	125
5	女子に期待する人生目標・職業……………	127
6	性格に対する期待……………	129
7	学校教育にたいする態度……………	130
8	おわりに……………	133

### 1. はじめに

本稿では、子どもの学歴、職業、人生目標にたいする母親の期待、母親の学校教育にたいする態度についてのべる。

### 2. 子どもに期待する学歴

船員家族の子どもの進学率は前稿でのべたが、親が子どもに期待する学歴をしめたのが表19である。男の子にたいしては、職員家族は長男次三男に関係なく90%以上が大学に進学することを期待している。部員家族も長男には76.2

%が大学進学を期待しているが、次三男にたいしては51.0%のみで、高校まででよいと考えている家族が長男にたいしては21.4%であるが、次三男にたいしては42.9%で非常に多い。

女の子にたいしては、職員家族では89.5%、部員家族で40.8%が大学進学を期待している。

船員家族の子どもにたいする学歴期待を他の家族と比較してみると、非常に教育熱心であるといわれる都内の某団地では、男の子に大学進学を期待する家族は95%に達する。父親の学歴水準では部員家族と同程度と思われる工具家族のばあいは約50%である<sup>5)</sup>。また、女の子にたいしても、さきにあげた団地の家族で57.0%工具家族で12.5%が短大を含めた大学進学を期待している。

調査対象となった船員家族はさきにのべたように、港湾都市以外に居住している家族が70%をしめているので、東京都内で高い教育水準にある地域の家族に匹敵する高い期待学歴をもっていることは、船員家族の教育欲求の高さをしめしているといえよう。

母親の学歴と期待学歴の間には表20にしめすように有意な関係が認められた。高学歴の母親

表19-1 男の子に期待する学歴

		中学まで	高校まで	大学まで	不 明	計
職家 員族	長 男	0.0	4.1	94.2	1.7	100.0(121)
	次 三 男	0.0	4.7	93.0	2.3	100.0( 43)
部家 員族	長 男	0.0	21.4	76.2	2.4	100.0(126)
	次 三 男	2.0	42.9	51.0	4.1	100.0( 49)

( ) 内実数，以下同じ。

表19-2 女の子に期待する学歴

	中学まで	高校まで	短大まで	大学まで	不 明	計
職 員 家 族	0.0	17.3	48.8	30.7	3.2	100.0(127)
部 員 家 族	0.7	51.2	29.9	10.9	7.3	100.0(137)

表20-1 期待学歴と母親の学歴—男の子—

	高校以下	大学まで	計
旧高小, 新中卒以下	35.0	65.0	100.0(120)
旧高女, 新高卒以上	4.1	95.9	100.0(193)
計	16.0	84.0	100.0(313)

$$\chi^2=52.4275 \geq 0.01$$

表20-2 期待学歴と母親の学歴—女の子—

	高校以下	大学まで	計
旧高小, 新中卒以下	59.0	41.0	100.0( 95)
旧高女, 新高卒以上	23.4	76.6	100.0(137)
計	37.9	62.1	100.0(232)

$$\chi^2=33.343 \geq 0.01$$

表21-1 期待学歴と母親の年代  
—男の子—(部員家族)

	高校まで	大学まで	計
30才台以下	32.8	67.2	100.0(125)
40才台以上	18.2	81.8	100.0( 44)
計	29.0	71.0	100.0(169)

$$\chi^2=81.3228 \geq 0.01$$

表21-2 期待学歴と母親の年代  
—女の子—(部員家族)

	高校以下	短大まで	大学まで	計
30才台以下	63.4	25.6	11.0	100.0( 82)
40才台以上	41.0	45.4	13.6	100.0( 44)
計	55.5	32.6	11.9	100.0(126)

$$\chi^2=94.9410 \geq 0.01$$

に子どもにたいしても大学進学を期待しているものが多い。

また、母親の年代との間には職員家族では関係がなかったが、表21にしめすように部員家族では有意な関係が認められた。すなわち、男の子にたいしても、女の子にたいしても低年令層より40才台以上の高年令層の家族に期待学歴が

たかい傾向がみられる。男の子に大学まで進学を期待しているのは、30才台以下で67.2%にたいして40才台以上では81.8%である。また、女の子には大学のうちでも短大進学を期待しているのは、30才台以下が25.6%にたいして、40才台以上では45.4%である。年令の低い家族ほど、子どもにたいする進学期待もたかいのが一般的傾向と思われるが、部員家族では逆な傾向がしめされた。この原因として、教育欲求のたかい都市居住家族が40才台以上に集中し、地域差が影響していることも考えられるが、表22にしめすように教育欲求のたかい家族が集中している東京、大阪を含む港湾都市居住家族は、むしろ30才台以下の低年令層に多い。したがって、居住地による差とはいえない。また、40才台以上に高学歴者が多い傾向もみられない。したがって、年令による差と考えてよいだろう。

表22 居住地と妻の年代 (部員家族)

	港湾都市	その他の地方	不明	計
30才台以下	65.4	21.5	13.1	100.0(274)
40才台以上	34.8	59.6	5.6	100.0( 89)
計	57.9	30.9	11.2	100.0(363)

子どもにたいする期待学歴についての調査結果をのべたが、ここで問題になることは、第一に高い学歴をのぞむ家族が多く、また、第5報でのべたように実際の進学率も非常にたかいことである。これは仮説でものべたように、船員という職業の特性に、学歴を重視する考え方を作る要因があるためであろう。また、部員家族が父親の学歴水準では同程度と思われる工員家族に比較して、子どもにたいする期待学歴がたかいこと、高年令層の家族にこの傾向が顕著であるのは経済的理由のほかに学歴によって左右

される船内生活が、職員より不利であること、とくに年齢が高くなるにしたがって、職員と部員の差が拡大されていくので、学歴を重視する傾向が強くなるのではなからうか。

第二は、部員家族における長男と次三男にたいする期待学歴の差である。団地はもちろんのこと、農村、地方小都市に居住する家族でも長男と次三男にたいする差はみられない。この船員家族における差は、実際の経済上の問題もあって、長男だけでもせめて大学という考え方があること、第二に長男とその他の子どもが差別され、長男には家の後継者としての地位が与えられ、家中心的な考え方があるのではないかと思われる。経済的理由が差別の原因だとしても、経済的に余裕がないから、せめて長男だけでも大学にやりたいという考え方自体が、すでに長男と次三男を差別しているといえよう。

第三は男子より女子にたいする期待学歴が低い点である。これは船員家族のみでなく一般家族にも共通した傾向で、女子は結婚し家事に従事することが期待されているので、あえて大学教育までは必要ないという考え方があるためである。

### 3. 子どもの配遇者に期待する学歴

船員家族の自分の子どもにたいする高い期待学歴は、子どもの配遇者にたいしてはどうであ

ろうか。表23は子どもの結婚の相手に期待する学歴である。職員家族では娘の配遇者、すなわち、むこにたいして66.8%が、息子の配遇者、すなわち、嫁にたいしても30.6%が大学卒の学歴を期待している。部員家族は期待学歴も低く、大学卒の学歴を嫁に期待しているのは8.8%のみであるし、娘の配遇者にたいしても33.8%であるが、学歴を問わないと答えているのは職員家族にくらべて多い傾向がみられた。

母親の学歴と配遇者にたいする期待学歴の間に表24にしめすように有意な関係が認められた。高学歴層は配遇者に大学卒業者を望むもの

表24-1 娘の配遇者に期待する学歴と母親の学歴

	高校卒以下	大学卒	学歴を問わない	計
旧高小 新中卒以下	33.1	35.2	31.7	100.0(139)
旧高女 新高卒以上	12.9	70.6	16.5	100.0(248)
計	20.2	57.9	21.9	100.0(387)

$$\chi^2=46.4787 \geq 0.01$$

表24-2 息子の配遇者に期待する学歴と母親の学歴

	高校卒以下	大学卒	学歴を問わない	計
旧高小 新中卒以下	67.0	6.6	26.4	100.0(151)
旧高女 新高卒以上	54.2	32.9	12.9	100.0(273)
計	58.7	23.6	17.7	100.0(424)

$$\chi^2=41.4672 \geq 0.01$$

表23 子どもの結婚相手に期待する学歴

	高校卒以下*	大学卒	学歴を問わない	わからない	不明	計
嫁	職員家族	30.6	9.6	6.3	8.9	100.0(271)
	部員家族	8.8	19.4	5.1	11.7	100.0(273)
むこ	職員家族	66.8	10.4	7.5	8.3	100.0(241)
	部員家族	33.8	23.4	7.8	10.1	100.0(257)

\* 中卒は1名のみ

表25 息子の配遇者に期待する学歴と

		母親の年代			
	高校卒以下	大学卒	学歴を問わない	計	
20才台以下	55.1	16.1	28.8	100.0	( 87)
30才台	62.3	20.9	16.8	100.0	(244)
40才以上	57.5	30.2	12.3	100.0	(139)
計	59.5	22.8	17.7	100.0	(470)

$$\chi^2=14.8191 \geq 0.01$$

が多く、低学歴層は高校卒および学歴を問わないものが多い。

母親の年令と期待学歴との間には、息子の配遇者すなわち嫁にたいする期待学歴についてのみ有意な関係がみられた。(表25)大学卒業者を嫁として望むのは40才台以上の高年令層の母親に多く、学歴を問わないのは20才台以下の低年令層に多い。この傾向は職員部員家族に共通している。部員家族は子どもに大学卒の学歴を期待するのは40才台以上に多いので、嫁にたいしても高学歴を期待しているという考え方ともとれるが、子どもにたいする期待学歴では差がなかった。職員家族にも共通した傾向であることは、他の要因が働いていると考えられる。これは40才台以上の母親になると、年令的にも子どもの結婚は身近な問題であるが、20才台以下では子どもも少さく、結婚は漠然とした問題なので、学歴にたいする期待もはっきり定まっておらず、学歴を問わないという考え方が多くなるのではないだろうか。

さきにもふれたように、子どもの配遇者にたいする期待学歴は、子どもへの期待学歴と密接に関係しあっていると思われる。息子にたいする期待学歴とその配遇者である嫁にたいする期待学歴をみたのが表26である。息子の嫁には、息子と同程度かそれ以下の学歴を期待している

表26-1 息子とその配遇者にたいする期待学歴

息子	嫁			計	
	高校まで	大学まで	学歴を問わない		
高校	職員家族	100.0	0.0	0.0	100.0( 4)
	部員家族	68.9	0.0	31.1	100.0( 45)
大学	職員家族	51.4	39.4	9.2	100.0(142)
	部員家族	67.0	19.4	13.6	100.0(103)

表26-2 娘とその配遇者にたいする期待学歴

娘	むこ			計	
	高校まで	大学まで	学歴を問わない		
高校まで	職員家族	42.1	52.6	5.3	100.0(19)
	部員家族	44.8	20.7	34.5	100.0(58)
大学まで	職員家族	5.7	87.5	6.8	100.0(88)
	部員家族	22.4	61.2	16.4	100.0(49)

家族が多い。とくに部員家族では息子に大学進学期待をもっている、嫁には同程度の学歴をのぞむのは職員家族より少ない。娘の配遇者には嫁のばあいとは逆に、娘と同程度か、より高い学歴を期待する家族が多く、後者の傾向は職員家族に顕著である。

つぎに、息子—娘の配遇者、娘—息子の配遇者というように同性のものにたいする期待学歴を比較してみよう。問題を鮮明にするために、

表27-1 男の子にたいする大学進学期待と娘の配遇者にたいする期待学歴

	高校まで	大学まで	学歴を問わない	計
職員家族	2.9	82.4	14.7	100.0(68)
部員家族	20.6	58.8	20.6	100.0(63)

不明をのぞいた

表27-2 女の子にたいする大学進学期待と息子の配遇者にたいする期待学歴

	高校まで	大学まで	学歴を問わない	計
職員家族	43.8	47.9	8.3	100.0(48)
部員家族	58.6	24.1	17.3	100.0(29)

不明をのぞいた

子どもに大学進学を期待するものだけを取り出してみた。不明をのぞいたために対象者が少なく、ケースであるが(表27),男の子に大学進学を期待している家族は娘の配偶者、すなわち、むこにたいしても大学卒業を望んでいるものが多いが、この傾向は職員家族にいちじるしく、部員家族では58.8%で、息子より低い高校卒の学歴を期待しているのが20.6%である。娘—嫁のばあいには、息子—むこにおけるほどの一致度はみられず、娘にたいする期待学歴より低い。とくに部員家族にはこの傾向が顕著で、娘に大学進学を期待している家族のうち、58.6%は嫁に高校卒の学歴を期待している。

子どもの配偶者に期待する学歴についてのべたが、その結果、配偶者に大学卒業者を望むのは職員家族に多かった。しかし、嫁にたいする期待学歴は娘のばあいより低く、娘には大学進学期待をもっている親でも嫁には高校卒業者を望むのは部員家族に、とくに多い。男の子より女の子にたいする期待学歴が低いと同じ理由から、結婚生活においても妻には夫より低い学歴を期待するものが多いが、この傾向は船員家族に限られてはいない。しかし同じ妻の地位に座る娘と嫁にたいする期待学歴の違いは、親が期待する嫁のばあいには、家族を主にした考え方が入り、家族の教育水準が影響しているのではないだろうか。このことは学歴の高い母親に大学卒の嫁を望む傾向がみられること、家族の教育水準が低く、次三男、女の子への期待学歴が低い部員家族では、嫁にたいしても期待学歴が低いことなどによって考えられる。

娘の配偶者に期待する学歴は、学歴を問わない、分らないなどの不確定意見が多いために、大学進学を期待する率は息子にたいするより低

いが、とくに著しい差がみられたのは、部員家族の長男との差である。また、娘の配偶者に高校卒程度の学歴を期待しているのは、次三男のばあいより少ない。後者は、娘に中卒のみの学歴を期待している家族は少なく、高校卒を期待するばあいには、さきにものべたように、夫には妻より高い学歴をのぞむ傾向があるので、娘の配偶者には、できれば高卒以上が望まれるのだろう。しかし、この考え方は部員家族では、学歴を問わないというような漠然とした意見として表明している家族が多いのにくらべて、職員家族では、娘は高卒でも大学卒の配偶者を望む傾向が明らかである。これは、前者の理由とも重なり、家族全体の教育レベルが影響していると思われる。

職員家族の男の子は、実際の教育レベルでも、期待レベルでも大学程度であり、家族の教育レベルを維持するためには同性である娘の配偶者にも大学卒を期待することになる。部員家族は父親の教育レベルでは同程度と思われる層と比較して、子どもの教育レベルは、実際にも、期待学歴でも高い。とくにこの傾向は次三男より長男に顕著である。このことは、部員家族のばあい家族の教育レベルが上昇過程にあり、長男がその先端に立っているものと思われる。娘の配偶者は次三男と同じレベルか、できればもう少し高い教育レベルが期待されている。

このように、子どもの配偶者に期待する学歴は、家族の教育水準と密接に関連している。学歴が階層を決定する一因子であるとするれば、階層とも関連しているといえるかもしれないが、それには、さらに分析が必要である。

#### 4. 子どもに期待する人生目標・職業

男と女では人生目標は、同一の項目では難しいと考えたので、男女別の型を設定した。男子にたいしては、統計数理研究所で行った調査を参考にして、表28にしめす7タイプを設定し、そのうち自分の子どもに期待する人生目標を一つだけ選ばせる方法をとった。

金や名誉を考えず自分の趣味にあったくらし方を期待する親がもっとも多く、36.1%である。この型を趣味型とよぶことにする。この趣

表28 人生目標—男子—

1. 金持型	2.3
2. 出世型	11.9
3. 趣味型	36.1
4. 楽天堂型	2.3
5. 家庭型	6.6
6. 正義型	21.4
7. 献身型	0.7
その他	15.0
不明	3.7
計	100.0(562)

1. 一生懸命働き金持になる。
2. まじめに勉強して名をあげる。
3. 金や名誉を考えず自分の趣味にあったくらし方をやる。
4. その日その日をのん気にくよくよしないでくらす。
5. 自分と家族の幸福だけを楽しみに働く。
6. 世の中の正しくないことを押しつけて清く正しくくらす。
7. 自分の一身のことを考えず社会のためにすべてを捧げてくらす。

味型は、その日その日をのん気にくよくよしないでくらすという楽天堂型、自分と家族の幸福だけを楽しみに働く家庭型、世の中の正しくないことを押しつけて清く正しくくらす正義型、自分の一身のことを考えず社会のためにすべてを捧げてくらす献身型を一括したものと見えよう。それでもなお、これらの型に分かれずに趣味型を期待する親が多いのは、金や名誉を特に考えることなく、自分の好きなように生きる、すなわち、本人にまかせるという考え方がつよく、子どもにたいして、積極的な期待をもっていない親もこの趣味型には多いと思われる。趣味型について、正義型が21.4%、まじめに勉強して名をあげることを期待する出世型が11.9%、家庭型が6.6%である。職員と部員家族の間には差がみられない。

男の子の人生目標にたいする期待は母親の年代によって、部員家族では異った傾向がみられた。(表29)正義型は高年令層に、趣味型の生き方を期待するのは低年令層の母親に多い傾向がみられた。正義型の人生目標には価値判断的な選択基準が入る可能性がたかい。また、母親の学歴と人生目標にたいする期待との間にも表30にしめすように有意な関係がみられ、低学歴層の母親に出世型、趣味型、家庭型が、高学歴層に正義型を期待するものが多かった。

「国民性の研究」によると<sup>6)</sup>、現在の大人のくらし方としては、趣味型と楽天堂型が45%をし

表29 人生目標と母親の年代—男子—(部員家族)

	出世型	趣味型	正義型	家庭型	その他	計
30才台以下	12.4	44.6	19.2	7.2	16.6	100.0(193)
40才台以上	14.0	25.0	28.2	9.4	23.4	100.0(64)
計	12.8	39.8	21.4	7.7	18.3	100.0(257)

$$0.01 \geq \chi^2 = 12.2332 \geq 0.05$$

表30 人生目標と母親の学歴—男子—

	出世型	趣味型	正義型	家庭型	その他	計
旧高小, 新中卒以下	14.2	41.4	17.2	10.0	17.2	100.0(169)
旧高女, 新高卒以上	10.9	35.4	25.4	5.1	23.2	100.0(311)
計	12.1	37.5	22.5	6.9	21.0	100.0(480)

$$0.01 \geq \chi^2 = 11.0832 \geq 0.05$$

めている。趣味型には良い意味での生き方も含まれていようが、くよくよしないでその日その日をのんきにくらすという楽天型に近いタイプも多いのではなからうか。このような生き方をしている親が、子どもに趣味型の生き方を期待するとしても、発展的な生き方はあまり期待できない。子ども自身で好きなように生きるという一見民主的ともみえる態度は、むしろ家庭におけるしつけの欠除ともいえるように思う。

つぎに、子どもに期待する職業についての調査結果をのべる。表31にしめすように、長男、次三男とも専門的技術的職業従事者がもっとも

多く、特に職員家族では長男にたいして35.1%がこの職種を希望している。専門的技術的職業のうちでも技術者がもっとも多く、これは部員より職員家族に、ついで多い事務従事者は部員家族に多い。子どもが父の職業をついで船員になることを期待しているのは、長男にたいしては510名のうち9名、次三男にたいしては190名のうち10名だけで、逆に船員以外の職業とわざわざことわっている人も11名いる。船員の生活を実際に体験し、熟知したばあいには船員志望者は非常に少なくなることを意味している。

表31 希望作業—男子—

	長 男			次 三 男			
	職 員	部 員	全 体	職 員	部 員	全 体	
専門的技術的 職業従事者	技術者	21.8	17.4	19.0	14.3	15.1	14.1
	教育関係者	4.6	3.2	3.7	2.0	5.8	3.7
	医療保健技術者	6.3	3.6	4.7	5.1	2.3	3.7
	芸 術 家	0.4	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
	そ の 他	2.0	1.2	1.6	4.0	0.0	3.2
計	35.1	25.4	29.2	25.4	23.2	24.7	
事務従事者	9.6	18.2	14.5	14.4	16.3	15.8	
管理的職業従事者	1.7	0.8	1.4	0.0	0.0	0.0	
船 員	0.8	2.8	1.8	3.0	4.6	5.3	
その他(船員以外)	8.3(1.3)	9.1(2.0)	8.9(1.6)	13.3(1.0)	9.3(2.3)	10.0(1.6)	
本人の適性, 能力	4.6	3.9	4.1	2.0	3.5	2.6	
本人の希望	15.1	12.6	13.3	19.4	12.8	15.8	
わからない	6.3	7.5	6.6	10.2	9.3	9.5	
不 明	18.5	19.7	20.2	12.3	21.0	16.3	
計	100.0(239)	100.0(253)	100.0(510)	100.0(98)	100.0(86)	100.0(190)	

### 5. 女子に期待する人生目標、職業

女の子の生き方にたいする期待は、戦前までは夫の立身出世を助けて内助の功を發揮し、家庭をおさめていくことであった。しかし、戦後女子も男子と同等の権利をもった人間として認められてから、女子もまた能力を生かした生き方を目的とする人が増加してきた。能力を生かす方法を職業に求めるのが、これまでの傾向であったが、最近になって育児家事を行なう主婦という仕事の中で能力を生かすという考え方がでてきた。

したがって、女子の生き方にたいする期待は家庭と職業という二つの要因をどのように関連づけているかが、大きく影響する。

船員家族の女の子に期待する人生目標は表32に示すように、円満な家庭を作り立派に子どもを育てるという家庭型の生き方を期待する人が67.5%をしめている。ついで自分の能力を生

表32 人生目標—女子—

1. 出世型	0.8
2. 内助型	1.9
3. 共存型	6.1
4. 家庭型	67.5
5. 享楽型	0.4
6. 能力型	19.6
7. 献身型	0.4
その他	1.0
不明	2.3
計	100.0(524)

1. 女の子自身が社会的、経済的に認められる。
2. 夫の社会的経済的成功を助ける。
3. 女の子も夫もともに能力を生かしていく。
4. 円満な家庭を作り、立派に子どもを育てる。
5. できるだけ生活を楽しむ。
6. 女の子自身の能力を生かし、生甲斐のある生活をする。
7. 社会のために献身する。

かし生き甲斐ある生活をするという能力型が19.6%である。女の子も夫もともに能力を生かしていくという能力共存型が6.1%なので、夫とともにしろ、自分だけにしろ能力を生かすような生き方を期待する考え方は25.7%にのぼっている。かつては女子の生き方の手本とされた内助型の生き方を期待するのは1.9%のみで非常に少ない。

表33に示すように母親の学歴と女子に期待する生き方の間に有意な関係がみられ、家庭型は低学歴層に、能力型は高学歴層に多い。また、年代では家庭型は20才台以下よりも40才台以上の高年令層に、能力型は逆に20才台以下の低年令層の母親に多い傾向がみられた。

表33 女子の人生目標と母親の学歴

	家庭型	能力型 共存型	その他	計
旧高小 新中卒以下	76.1	19.2	4.7	100.0(172)
旧高女 新高卒以上	66.3	29.5	4.2	100.0(285)
計	70.0	25.6	4.4	100.0(457)

この能力型の生き方は、高い学歴をもった若い女子の間で増加している。女子大学生のばあいは、希望する生き方として家庭型をあげているのは22.8%で、能力型が61.2%にものぼっている<sup>7)</sup>。しかし、さきにものべたように、この能力型はそのまま職業に連がるというのではなくて、自分の能力を家庭の中でしばしていこうという考え方も含まれている。

次に職業と結婚生活の両立についてどう考えているかをみたのが表34である。船員家族のうちでも夫が内航に従事している家族、および部員家族では妻が職業をもっている率がたかいが<sup>8)</sup>、これが子どもの職業継続にたいする考え方にどう影響するだろうか。



表34 職 業 観

	船員家族
一時型(結婚するまで 子どもが生まれるまで)	42.9 14.9
中断型(子どもが生まれたらやめて、手 がかかからなくなったらまた働く)	19.9
継続型(結婚しても、子どもが生まれて) も続ける)	13.2
わからない	6.1
不明	3.0
計	100.0(296)

全体の58%が、女の子を卒業後就職させることを希望しており、就職させたくないと答えているのは12%のみである。女子の就職は家計補助的性格がつよく、出身層も限られていたが、現在では女子を就職させる家庭層は拡大し、卒業してから結婚までの期間職場にでてゆくのは常識的にさえている。しかし、結婚生活と職業の両立がかなりむずかしいためあって、職業を継続的なものと考えている人は少なく、「国民性の研究」によっても、女が家の仕事のみならず世間の仕事にたずさわることを60から70%が支持していながらも、結婚した女が外にでて働くことに賛成するのは10%以下で、80%が家庭を守る生き方を支持している<sup>9)</sup>。

船員家族のばあいも、女子の職業は結婚または子どもが生まれるまでと限った考え方が全体の57.8%をしめている。ついで、子どもが生まれたら中断し、手がかかからなくなったら、また働くという中断型が19.9%である。結婚して子どもが生まれても、ずっと職業を続ける職業継続型を期待するのは13.2%である。職業志向では継続型、ついで中断型がつよいといえよう。

母親の学歴と職業生活にたいする期待との間には、有意な関係は認められなかったが、職業一時型は低学歴層の母親に、中断型、継続型を

期待するのは高学歴層の母親に多い傾向がみられた。また、母親の年代との間には、職員家族には差がみられなかったが、部員家族では表35にしめすように、一時型は40才台以上に、中断型は30才台以下の母親に多かった。

表35 職業継続にたいする期待と母親の年代  
(部員家族)

	一時型	中断型	継続型	計
30才台以下	58.9	26.1	15.0	100.0(180)
40才台以上	70.9	15.1	14.0	100.0(86)
計	62.8	22.4	14.8	100.0(266)

表36 期待する職業(女子)

		職 員	部 員	全 体
専門的技術的 職業従事者	教育関係者	9.3	9.7	10.2
	医療保健者	3.1	0.6	1.7
	栄養士	1.6	0.6	1.0
	その他	3.9	1.2	2.4
	計	17.9	12.1	15.3
事務従事者		18.5	20.7	19.7
和裁・洋裁従事者		1.6	7.8	5.4
その他		17.9	10.8	13.6
家庭と職業を両立できる		2.3	4.5	3.4
本人の希望、適性、能力による		14.7	9.1	11.1
わからない		0.8	3.3	2.4
不明		26.3	31.7	29.1
計		100.0(129)	100.0(155)	100.0(296)

女の子に期待する職業は表36にしめすように、事務従事者、教育関係者、和洋裁従事者が多い。不明が多いのは、子どもが小さくまだ明確な希望としてでてこないためだろう。教育関係者をのぞく専門的技術的職業従事者は部員より職員家族に、和洋裁従事者は部員家族に多い。

女子の生き方にたいする期待は、人生目標、

職業と家庭の両立にたいする考え方、期待職業などによって、二つないし三つのタイプに分けられる。家庭志向型と職業志向型、さらにその中間のタイプである。家庭志向型は人生目標では家庭型、職業では一時型が多く、店員事務員などの専門的技術を必要としない職業を希望する。自分の能力をのばしていくことを目的とする能力型は、職業では中断型、継続型を希望する人が多く、専門的技術を必要とする職種を希望する傾向がみられる。家庭と職業の両立を無理なく行おうとする考え方の一つが中断型の職業志向である。さきにものべたように、能力型の人生目標でも、能力を家庭生活の中でのばしていこうとする考え方と、職業を通してのばしていこうとする考え方がある。

船員家族は家庭志向型の生き方を子どもに期待する人が $\frac{3}{4}$ をしめているが、大学婦人協会の調査によると、女子大学生の希望する生き方では、家庭志向型はこれより少なく、職業志向型がふえている。また、船員家族でも低年齢層の母親に職業志向型を期待する人が多いことからみて、今後このような生き方は多くなるのではなからうか。このような生き方をしていく上で問題になるのが、家庭、とくに育児と職業をいかにして両立していくかであり、どう対処していくかが女子の生き方を大きく転換させることになるだろう。

## 6. 性格にたいする期待

新教育がその目的としてきた自主的な性格を子どもに期待する考え方と、旧教育において強調されてきた従順的性格を期待する考え方とに分け、親の意識をみた。表37に示すように、自主的性格期待が43.6%、従順的性格期待が

表37 期待する性格

自主的性格	43.6
従順的性格	11.2
どちらともいえない	35.1
不明	10.1
計	100.0(758)

表38 子どもの性格にたいする期待と  
母親の学歴(職員家族)

	自主的志向	従順的志向	どちらともいえない	計
旧高小 新中卒以下	46.0	21.6	32.4	100.0(37)
旧高女 新高卒以上	43.6	9.8	46.6	100.0(264)
計	43.8	11.3	44.9	100.0(301)

$$0.1 \leq \chi^2 = 5.3879 \leq 0.05$$

表39 子どもの性格にたいする期待と  
母親の年代(職員家族)

	自主的志向	従順的志向	どちらともいえない	計
20, 30才台 以下	44.8	9.1	46.1	100.0(230)
40才台以上	42.7	19.8	37.5	100.0(96)
計	44.2	12.2	43.6	100.0(326)

$$0.05 \leq \chi^2 = 7.4328 \leq 0.01$$

11.2%で自主的志向が有意に多い。

母親の学歴と性格期待との間に、職員家族では有意な関係がみられ、(表38)従順的期待は低学歴の母親に多かった。また、年代との間には、部員家族では差が認められなかったが、職員家族では40才台以上に従順的志向が多い傾向がある。(表39)

この従順的志向は、自主的な考え方や行動を目標としている学校教育のあり方とくいちがひ、子どもの教育に一貫性を欠くことになりやすい。

## 7. 学校教育にたいする態度

船員家族は父親の職業的特色から、学校教育に非常に熱心なのではないかという仮説を設定した。ここでは小中学生の子どもをもつ母親の、子どもの勉強にたいする態度、学校教育への参加、学校教育にたいする態度についてとりあげる。

### A 子どもの勉強にたいする態度

子どもにたいする進学期待が高いことは、さきにものべたとおりであるが、その期待を実現していくためには子どもの成績が問題になってくる。したがって、子どもの勉強にも非常に熱心である。表40にしめすように、学校の成績は学期末の成績はもちろん毎回のテストもかならず見る人が81.0%で、親の方からはなんともいわず、子どもにまかせているのは11.5%である。子どもの成績については、非常に気をつけ

ているグループと、子どもの出かたにまかせているグループに分けられ、中間的な態度は非常に少ない。表41は予習復習にたいする態度をしめしているが、62.9%が毎日時間をきめてやらせており、部員よりも職員家族に有意に多い。宿題やテストのあるときだけ予習復習をやらせている家族は19.6%で、これは職員より部員家族に多い。予習復習を子どもの自由にさせているのは14.7%であるが、ここには全く予習復習をしないばあいと、子どもが積極的にやるので、親が干渉する必要がないばあいとが含まれていると思われる。表42は、学校であったことを毎日子どもにきくかどうかの結果である。かならず聞くのが50.0%、ときどききくのが44.0%で、ほとんどきかないのは3.5%のみである。いちおう、学校での子どもの行動に注意しているといえよう。これらの三つの質問によって、

表40 子どもの学校の成績

	学期末の成績、テストの結果は必ず見る	学期末の成績はみる	親の方からはなんともいわない	不 明	計
職員家族	83.0	2.9	12.1	2.0	100.0(207)
部員家族	78.7	3.3	11.4	6.6	100.0(211)
全 体	81.0	3.0	11.5	4.5	100.0(434)

表41 子どもの予習復習

	毎日時間をきめてやらせる	宿題やテストのあるときだけやらせる	子どものするままにする	不 明	計
職員家族	68.0	15.5	15.0	1.5	100.0(207)
部員家族	57.8	23.2	14.7	4.3	100.0(211)
全 体	62.9	19.6	14.7	2.8	100.0(434)

表42 その日学校であったことを子どもにきくか

	かならずきく	ときどききく	ほとんどきかない	不 明	計
職員家族	51.2	45.4	1.9	1.5	100.0(207)
部員家族	49.8	41.7	4.7	3.8	100.0(211)
全 体	50.0	44.0	3.5	2.5	100.0(434)

表43 PTAの会合に出席するか

	かならず出席する	ときどき出席する	出席しない	不 明	計
職員家族	70.0	26.6	1.0	2.4	100.0(207)
部員家族	63.5	25.6	2.8	8.1	100.0(211)
全 体	66.4	26.7	1.8	5.1	100.0(434)

表44 PTAの役員

	している した	して いない	不 明	計
職員家族	66.2	31.9	1.9	100.0(207)
部員家族	53.1	37.4	9.5	100.0(211)
全 体	59.9	34.6	5.5	100.0(434)

表45 PTAの役員の経験の有無と母親の年代

	経験ある	な い	計
30才台以下	55.2	44.8	100.0(288)
40才台以上	82.5	17.5	100.0(120)
計	63.2	36.8	100.0(408)

$$\chi^2=27.1402 \geq 0.01$$

子どもの勉強にたいする親の態度を知ることには、やや無理があるが、大体の傾向は知れると思う。

#### B 学校教育への参加

船員家族は学校教育にも熱心に参加している。PTAの会合にも66.4%が、かならず出席し、まったく出席しないのは1.8%のみで非常に少ない。(表43)また、PTAの役員を現在している人、過去にした経験をもっている人は、全体の60%にも達し、部員より職員家族に多い。(表44)このPTA役員の経験の有無は子

もの年齢が影響し、大きければその機会も多い、このことは表45にしめすように、母親の年代との間に有意な関係をしめしている。子どもの年齢の高い40才台以上の母親では82.5%がPTA役員の経験をもっている。職員家族では86.0%部員家族でも77.2%である。また、母親の学歴のたかいばあいにPTAの役員になっている比率がたかいが、義務教育以下の学歴の母親でも、55.1%がPTA役員の経験をもっている。

このように、PTAに積極的に参加しているが、さらにPTA以外にも学校に行くものが多い。(表46)PTA以外にはいかないのは51.2%で、半数が、しばしば、あるいは、ときどき学校にでかけていく。どんなときに学校にでかけていくのだろうか。子どもの様子のおかしいとき、母親が面会に行くときなど、船員家族特有の理由がでてくる。さきにものべたが、父親の留守中の相談相手として教師が重要な役割を果たしているが、しばしば、あるいはときどき学校にでかけていって、相談することになるのだろう。

このように、子どもの勉強にも、学校教育にも非常に熱心であるが、子どものしつけは家庭

表46 PTA以外に学校に行くか

	しばしばいく	ときどきいく	い かない	不 明	計
職員家族	18.8	24.6	52.7	3.9	100.0(207)
部員家族	17.5	24.2	47.9	10.4	100.0(211)
全 体	18.4	23.5	51.2	6.9	100.0(434)

表47 進 学 決 定 者

	父	母	教 師	本 人	そ の 他	不 明	計
職員家族	31.4	2.4	11.1	48.8	2.5	3.8	100.0(207)
部員家族	23.2	4.7	14.7	45.0	3.4	9.0	100.0(211)
全 体	27.4	3.7	12.7	46.8	3.0	6.4	100.0(434)

の責任であるという考え方がつよく、学校に期待するのは1.9%のみで、「教育意識調査」の結果の12.2%より少ない。また、進学決定権は本人について、父親が多く、教師は11から15%で、予想したより少ない。進学決定は経済的要素などが入ってくるために父親の発言力は強いと思われるが、経済的には上位である職員家族に部員家族より父親が決める率がたかい。(表47)

C 学校教育にたいする態度

現在行われている教育方法、教育政策にたいしする考え方を表48にしめす6項目について、賛否をきいた。親孝行や目上のものを尊敬する道徳、問題解決学習、高校女子の家庭科必修については賛成意見が70から80%にのぼっている。進路別、能力別学級編成については賛成と反対の間に差がみられないが、職員家族のばあいには賛成者が有意に多く、この賛成者は部員家族の賛成者より有意に多い傾向がみられ、両質問は同じ傾向をしめしている。男女共学については、一般的意見として賛成が34.0%で反対

より多く、とくに職員家族では賛成が48.5%で反対の22.7%との間に差がみられた。この賛成者は部員家族の30.1%より有意に多い。

職員家族は部員家族より子どもにたいする期待学歴もたかく、学校教育にも熱心に参加しているが、この層が進路別、能力別編成に賛成者が多いということは、男女共学についての賛成とはやや異質な内容をもっているのではないかと思う。共学思想は男女平等に根ざした思想として一般化され、私的な問題というよりも、広い公的な問題として判断されているように考えられるが、能力別編成、進路別編成などの問題では、自分の子どもにどう影響するかというような私的な問題としてのみ判断されている傾向があるように思う。この問題はすべての子どもに平等に教育をうけさせるといふ平等主義と、個々の子どもの能力を最大限に発揮させるといふ能力主義とに分かれ、論議されている。

現在の教育と戦前までの旧教育とを比較して、現在の教育を支持するもの21.4%はである。

表48 学校教育にたいする態度

	賛 成	反 対		賛 成	反 対
進路別学級編成	35.3	33.6	→	職員 39.5	32.2
男 女 別 学	25.0	34.0		部員 30.3	
能力別学級編成	37.7	32.6	↘	職員 22.7	48.5
親孝行や目上のものを尊敬する道徳	81.9	2.8		部員 30.1	
問題解決学習が学校教育の目標	72.0	4.9	↘	職員 42.1	31.3
高校女子の家庭科必修	71.4	2.7		部員 33.4	
			→	職員 76.0	
				部員 67.0	

しかし、旧教育を積極的に支持する率は低く、5.4%のみで、いちがいにいえないと答えているものが $\frac{3}{4}$ をしめている。

現教育の評価と母親の年代との間には関係がみられ、(表49)40才台以上より30才台以下の低年齢層の母親に現教育を支持する率がたかい。30才台以下の低年齢層の母親は自分自身が新教育を経験しているものが多いが、40才台以上になると、子どもを通してで直接経験していないことが、年代による差の原因と思われる。さきへのべた子どもへの性格期待が、30才台以下より40才台以上の母親に、旧教育で強調されてきた従順的志向がつよいことも、その理由であろう。

表49 現教育にたいする評価と母親の年代

	昔の教育がよい	今の教育がよい	いちがいにいえない	計
30才台以下	4.4	24.6	71.0	100.0(500)
40才台以上	8.7	16.8	74.5	100.0(196)
計	5.6	22.4	72.0	100.0(696)

$$0.1 \leq \chi^2 = 6.4001 \geq 0.05$$

このように、船員家族は学校教育に非常に熱心であるが、この熱心さが自分の子どもの成績や進学という狭い視野に限られるおそれがある。もちろん、この傾向は船員家族に限ったことではないが、その層の先端に行く可能性がある。また、学校教育への熱心さが、教師に依存する傾向と結びつきやすい。

## 8. おわりに

船員家族の子どもにたいする期待を職業、学歴、人生目標などによってまとめてみると、男の子にたいしては、職員家族では大学を卒業させ、専門的技術的職業従事者、事務従事者とし

て、見合結婚によって高校あるいは大学卒の配偶者を持ち、自分の趣味にあった生き方、あるいは清く正しい生き方を人生の目標として生きることを望んでいる家族が多い。部員家族では、長男は大学卒、次三男は大学か高校卒で、職業人生目標にたいする期待は職員家族とかわらないが、配偶者には高校卒の学歴をのぞむ家族がもっとも多い。

女の子にたいしては、立派に子どもを育て円満な家庭を作ること、を人生の目標として期待する家族が $\frac{3}{4}$ 弱をしめるが、これにたいして $\frac{1}{4}$ が自分の能力を生かす生き方を期待し低年齢、高学歴の母親に多い。前者の家庭型は事務員店員などの専門的知識を必要としない職業を望む家族が多く、職業を結婚あるいは出産までの一時的なものと考えている。したがって、この層では大学教育は主婦としての教養という考え方がつよい。後者の能力型は教師、保母など専門的知識を必要とする職業を希望する家族が多く、育児期間中は中断しても、あるいは結婚、出産に関係なく、ずっと職業を継続していく生き方ののぞむものが多い。また、職員家族は短大、4年制大学を卒業して、大学卒業した配偶者を、部員家族は高校、短大を卒業して、高校、大学卒業した配偶者をのぞむ家族が多い。

このような子どもへの期待を実現するために、親は学校教育に非常に熱心である。

第2回調査にもとづいて船員家族の子どもの教育についてのべた。ここで2、3の問題点を指摘したい。

A 船員家族は子どもの教育に非常に熱心である。これは教育費の支出、子どもの勉強にたいする態度、PTAへの積極的な参加、期待学

歴の高さなどの調査結果から知ることができる。このように教育に熱心な原因として、一般的理由のほかに、船員家族独自の理由として、職業の特性から父親が不在であるために、母親ひとりで子どもの教育の直接の責任を負わねばならないこと、船員という職業は職場と私的な生活の場が密着しているために、学歴が職業生活のみならず私的な生活にまで直接影響するので、学歴を重視する傾向があることなどが考えられる。学校教育に熱心であるのは好ましい傾向であるが、熱心さにとまって、おちいりやすい問題点をあげたい。

1. 学歴重視の傾向は、入学難のために進学を前提とした熱心さになりやすく、いわゆる教育ママといわれているような、自分の子どもの成績や進学のみに関心な視野のせまい層を作るおそれがある。

2. 船員家族は、父親にかわる相談相手として教師が重要な役割を果たしているが、教師に一方的に依存しやすい。

3. 夫がいない不安定な家庭生活を子どもによってみたそうとし、その結果、子どもにたいする態度が不安定になりやすい。

B 父親がほとんど家庭にいないため、安定した父子関係を作ることは一般の家族よりむずかしい。

C 部員家族にみられた長男と次三男の期待学歴差が、長男、次三男という序列による差別であるとしたら、現在の子どものには理解しにく

い考え方であり、親子関係とくに父子関係に影響する。

これらの問題の対策として

1. 子どもの適性にしたがって学校選択、職業選択をおこなう。

2. 客観的資料によって適性を判断する。学校で行っている適性検査、知能検査などを基礎にして、本人、教師、両親の意見を尊重する。

3. 教育の問題を自分の子どもだけに限って判断せずに、客観的に判断する習慣をつける必要がある。

4. 子どもの教育に、母親の生活を集中させるのではなく、個人としての生活をもつこと。

D 父親も母親にまかせているからという態度でなく、積極的に参加すること、子どもとの文通をひんばんに行い、母親を通した父子関係でなしに、直接的な父子関係を作る努力が必要である。

E 教師との関係でも、父親が教師に自分の考え方なり、問題なりを知ってもらうことにより、教師は適切な相談者として役割を果たすことになるだろう。

F 子どもにたいしては、両親が話しあい、一貫した態度であたる必要がある。しかし、3才未満のばあいには問題がある。

G 家庭におけるしつけの根本は、その家庭における価値観であり、両親の価値観が重要視される。